

日本語と英語における疑問文の形式と機能の対照

金杉 ペトラ

本研究のテーマは、日本語と英語の、疑問文の形式と機能における差だった。研究の進め方は六つのステップに分けられる：

- I. 理論的な基礎・前提、
- II. コーパスの準備、
- III. 疑問文の形式の比較、
- IV. 疑問文の機能の比較、
- V. 具体的な疑問文の比較、
- VI. まとめとこれからの課題

ここでも同じ順番で発表する。疑問文の形式と機能に影響する主な要素は、言語類型の差と文化的差である、ということが研究の前提となっている。言語類型的な差については主な要素として構文的役割の表現、語順、枝分かれ、疑問詞の位置、省略程度、文体的意味の表現、男女発話の差のレベルが挙げられる。文化的差に関しては、Wierzbicka氏の「Cultural Pragmatics」の結論をそのまま利用することにした(図1参照)。

疑問文のコーパスを準備する際に、一つの難しい点が発生した。それは、文のタイプに直接つながる、認識モダリティのマーカである。英語における明確な構文的なマーカ、つまり語順や形式動詞に対して、日本語では認識モダリティも義務モダリティも基本的に形態素によって表現されていることである。形態素に基づいた基準が曖昧なので、その他の判定基準を探す必要があった。ここでSaddock氏とZwicky氏の理論を利用することにした。Saddock氏とZwicky氏は、二つの重要な結論を出した。一つ目は、基本的な文の種類、つまり、平叙文、疑問文、命令文が言語に

おいて普遍的であるということである。二つ目は、特に態度のマーカがあるような言語の場合、文のタイプとその他のモダリティの違いを見極めるルールを考案した。以下の三つの条件を満たすマーカは文のタイプのマーカとして見なせるが、条件を満たさない文のマーカは文のタイプのマーカではなく、態度のマーカとして見なす。日本語では引用を紹介する「と」の助詞があるために、三番目の条件である「文のタイプに対応する部分を他の部分に詰め込めない」という条件を適用できないので、基本的にマーカの相互排他性という条件で、疑問文を見極めることにした。疑問文を文のタイプとして定義する必要があったが、日本語と英語における形式の対照ができるようにするために、同じような分類を採用することにした。最終的には、三つのレベルの分類、メインタイプ > タイプ > サブタイプを使った。それぞれのタイプの形式のマーカを表にまとめた。この段階でコーパスを用意しはじめた。日本語のオリジナルの芝居二つとその英語訳を用意し、日本語版から180の疑問文を集め、それに対応する部分を英語版から抜き出した。英語のオリジナルの芝居二つとその日本語訳についても同様の作業をした。翻訳の影響を防ぐために、形式と機能の分析には訳文のコーパスではなく、各言語のオリジナルのコーパスのみ使うことにした。パラレルコーパスは具体的な疑問文の比較のために利用した。

形式の比較は、まず疑問文のメインタイプの、それぞれの言語での分布を比べた(図2参照)。言語の違いによらず、選択疑問文の使用が非常に少ないことが

• 自己主張

日本人が言わないがアメリカ人言う:
 'I (don't)want this.'
 'I would(n't) like this.'
 'I think (don't) this.'

• 率直さ

日本人
 'I want something.'
 'I don't want to say this.'
 'I will say something else because of this.'
 'I think this person will know what I want.'

アメリカ人
 'I want X.'
 'I don't know if it is fine with you.'

図1 文化の差(Wierzbickas(1991)の分析による

分かった。主に使われている三つのメインタイプの分布は、日本語と英語で全く逆になっている。日本語では、真偽疑問文が一番、問い返し疑問文が二番目に多く、疑問語疑問文の使用は真偽疑問文の半分にも至らない。英語では、疑問語疑問文が他のメインタイプをはるかに上回る。真偽疑問文と問い返し疑問文は、コーパスに同じ頻度で現れる。

平叙文の質問として使用は興味深い。英語の方が圧倒的に多いことについては、二つの要因が考えらる。一つ目は先ほど説明した日本語における疑問文のマーカ―が、基本的に形態素によるということである。二つ目は、英語に比べると日本語は省略の可能な範囲が極端に広いということである。日本語では、疑問文を助詞でマークするが、動詞が普通体の形式になっている場合、助詞を省略できる。この場合、発音の印である疑問符だけが疑問文をマークする。英語では、分類的に語順が大事であるため、このマーカ―を無視するわけにはいかない。

次にそれぞれのオリジナルの各メインタイプの訳文で何のタイプになっているかを調べた。ここでは、疑

問語疑問文の比較のみ紹介する（図3参照）。

日本語の疑問語疑問文の85%（33文中の28文）は英語で疑問語疑問文として翻訳されていた。6%は真偽疑問文訳になっている。元のタイプと違うタイプに訳されている例は以下のとおりである：

疑問語疑問文→ 真偽疑問文

1) じゃあどうなんだい？ Don't you want to give her one?

疑問語疑問文→ 問い返し疑問文

2) いくらした？ And how much?

疑問語疑問文→ 平叙文

3) どうした？ You look like you've seen a ghost.

1) と 3) はどちらかという表現のしかたの差を示している。英語はより具体的で日本語はより曖昧な言い回しを使っている。2) は完全な文での省略の可能な範囲の差を示している。英語の文では動詞・主語・目的語の3つの要素が欠かせないため、この翻訳では完全な文である疑問語疑問文ではなく、CGELによると不完全な文として分類される問い返し疑問文で表現されている。

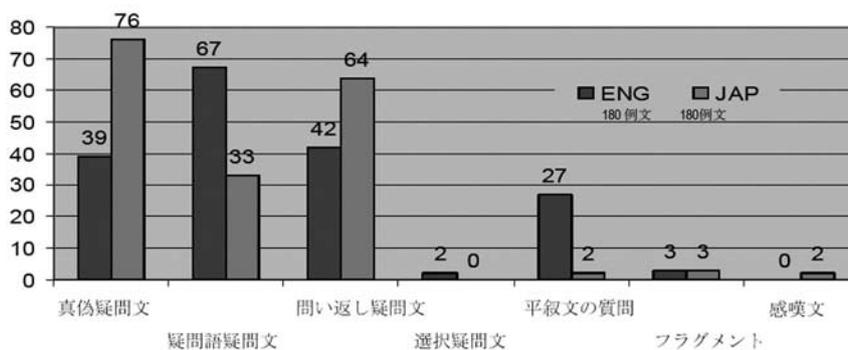


図2 疑問文の形式対照メインタイプ比較

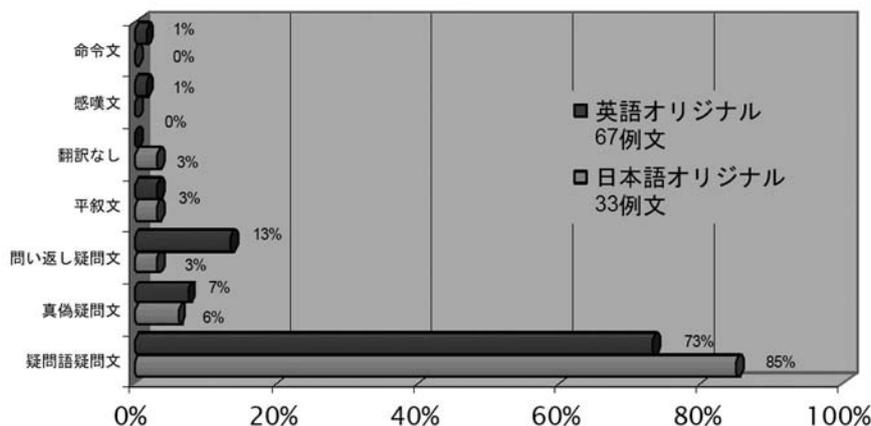


図3 疑問文の形式対照疑問語疑問文比較

日本語	英語
終止叙述助詞	肯定文の付加疑問文
断定詞の推量形	法動詞大量使用

形式の比較の次に機能の比較をした。疑問文の機能を調査するに当たっては、形式の調査と同様、分類とそれぞれのカテゴリーの判定基準がキーポイントである。調査の対象である疑問文の分類に対する適切な基準を設けるため、Searl氏の伝統的なアプローチとWierzbicka氏の革新的なアプローチを利用した。その結果、情報を求める機能・意味について合意を導く機能・活動を依頼する機能・表現機能、という四つの主な機能を構成する13の発話内力のカテゴリーを設けた(図4参照)。

この基準を利用しながら、コーパスの例文の発話内力を分類し、機能分布・各疑問文のメインタイプの機能の内訳・それぞれの発話内力を表す文型を比べた。

比較する各言語の中で、疑問文は何を表すために使われているのかをグラフ(図5参照)にまとめた。日本語の疑問文の機能の内訳は、意味について合意を導く機能が43%、情報を求める機能が34%、自分の立場/気持ちを表現する機能が14%、依頼する機能が8%となり、英語の場合は、情報を求める機能が43%、意味について合意を導く機能が29%、自分の立場/気持ちを表現する機能が14%、依頼する機能が12%となった。というのは、日本語のコーパスにおける40%以上の疑問文が対話者の理解を互いに確かめるために使われているのに対して、英語のコーパスでは同じ割合が片方が知らない情報を手に入れるために使われている。表現する機能は面白いことに、両方の言葉で同じ頻度で使われている。依頼する機能を持っている疑問文については、英語の方が多く使われている。機能グループの内訳の差だけではなく、グループ内の各発話内力の分布も興味深いと思われる。例えば、意味に

ついて合意を導く機能のグループには、「(省略) 気が付いて欲しい」と「(省略) 説明して欲しい」という発話内力がある。前者は、英語では圧倒的に多く、後者は日本語で多く使われている。また依頼の機能のグループには、四つの種類の発話内力があり、殆ど直接指示に近いものから、ただのススメに近い発話内力までのスケールが見られる。英語に比べると、日本語の疑問文は、ススメの役割の例が少なく、依頼が直接になればなるほど出現頻度が高くなる。英語は全く逆の傾向を示している。

この結果を、Wierzbicka氏の文化スクリプト(cultural scripts)と文化のキーワードの理論を借りて、解釈した。Wierzbicka氏によると、文化の最大価値を表すキーワードは、日本文化では「和」・「思いやり」・「遠慮」であり、英米文化では「自由」となり、文化スクリプトもそれなりのパターンを示す。言い換えると、日本の文化では同意、英米文化では各個人の権利が最優先されている。従って、日本人のコミュニケーションでは、情報把握・自分の立場の表現・他人に対する依頼よりも、互いに分かりあい、同意を達成することに重点を置けるから、合意に導く機能を表す疑問文が比較的多く発生する。英米では、個人権利である自己表現が大事であるが、やりとりの中で相手の権利と対立しないことは何よりである。同じ「個人権利」を守る原理で、依頼する機能を持つ疑問文が多く用いられていることも説明できる。命令形での直接の依頼は相手の自由と対立するから、英米文化の中では避けるべきである。日本語では、上下関係によって丁寧などが異なるが、命令文が英語ほど制限されてはいない。

同様な傾向が、それぞれの疑問文の形式上のメイ

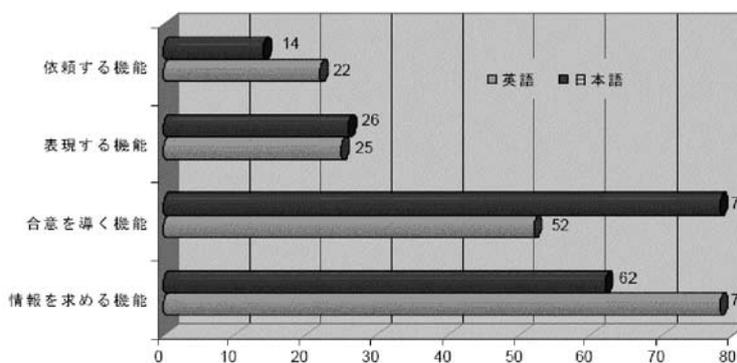


図5 各言語における機能分布

ンタイプにおける発話内力の分布でも見られる。実例として真偽疑問文を取り上げよう。情報を求める機能は、当然ながら、かなりの配分を占め、言語によらず約三分の一の真偽疑問文は情報を尋ねるために使われる。表現する機能を持つ疑問文の割合も両方の言語で10%ぐらいになり、非常に近い。逆に依頼する機能と合意を導く機能の分布は、大いに異なる。英語における依頼する機能の真偽疑問文は、日本語における同様の機能を持つ真偽疑問文より数多く使われている。依頼を表す英語の文の日本語の翻訳は、たいてい命令形になっている。そこで、面白い現象が見られる。依頼を表す疑問文は日本語の方が英語より直接的で、合意を導く場合とか情報を求める場合、英語の方が直接的である。合意を導く機能の疑問文については、日本語の方が英語より、真偽疑問文を1.5倍ほど高い頻度で使っている。日本語における合意を導く機能を表す真偽疑問文は、英語への翻訳では数多く、平叙文の質問・平叙文・問い返し疑問文として現れている。平叙文の質問・平叙文の翻訳は文化スクリプトを反映していると思われる。問い返し文の発生は何であろうか。当たり前であるが、形式の分類は、文に現れる言語単位に基づいている。しかし、日本語と英語の言語類型の差のため、省略が判定基準の一つである問い返し文の定義がどうしてもずれてしまう。日本語では、省略は範囲がかなり広くても、本格的な疑問文になるが、英語では、同じく省略された文は問い返し文または断片的な構造にしかならない。また一方、省略範囲における差も文化スクリプトで説明できる。個人個人における差と個人個人の権利を強調する英米文化では、相手も私と同じような考え方だという前提を持ってもらえないが、「おもいやり」に基づいている日本の文化では、互いに言わなくても分かるはずであるので、一つ一つ説明しなくても良い。

文化による価値観の差は、一般的な疑問文の種類分布や、疑問文が表す機能の分布だけではなく、具体的な例文でも見られる。論文では13の各発話内力を表現する例文を比較したが、ここで四つの例文に絞る。

1 番の例文は、

「ほれ、見ろよ。」

「Look at that, will you?」

日本語では、命令形と強調の終助詞「よ」の組み合わせである。というのは、依頼を表す発話内力と文の形式は一致し、表現が直接である。それに対して、英語では、命令形である主節が付加質問で和らげられて

いる。それに、付加疑問文に現れる動詞「WILL」は意思を表す動詞である。文の捉え方は、聞き手の意思を尊敬し、個人権利と対立しないようになっている。同じ場面なのに文の捉え方と直接性が言語によって極めて変わる。

次の例文は、

「四六一局の0 八六四番に問い合わせていただけませんか。」

「Would you mind telephoning 461-0864 and asking the superintendent for directions?」

日本語の丁寧なやりもらい表現の可能形動詞は典型的な間接依頼になる。文の捕らえ方に注目すると、行なうことは、する方から頼む方へ下りて移動する利益として捕らえている。要は、丁寧さのレベルは、個人自由の尊敬の結果ではなく、上下関係を強調した結果である。英語の場合は、同じ依頼を相手の反感についての問い合わせとして捕らえている。丁寧さの効果は、日本語でも見られる、話し手と聞き手の間に距離を置く条件形によってもたらされている。

次の例文は、日本語における省略の代表的な例文である。

「え?」 「Water blisters?」

感動詞だけを上昇調でいうと「意味が通じない。説明して下さい」という意味が伝わる。英語でも、もちろん同じような感動詞もあるが、日本語に比べるとそんなに多く使われていない。本例文でも、英語では疑問になっている現象を名詞句で具体化している。省略と文化スクリプトのつながりについては既に述べた。

「一セントの保険でも残していった人があった?」

「Which of them left a cent of insurance even?」

一般的には、日本語は表現が曖昧だと言われている。ところで、4 番の修辭疑問を見る限り、日本語は誤解を防ぐように論理的にもっと分かりやすく、簡単で直接的な質問になっている。英語は、同じ回答を得るためにもっと複雑な尋ね方を使う。今回の例文における差は文化スクリプトだけでは説明しにくい、このような例文が少なくないため、今後の課題にしようと思う。

以上のまとめは、日本語を第二言語として学んできた学習者にとっては、当たり前の話に過ぎないかもし

らない。研究で確実に分かったのは、形式と機能の観点から言えば英語と日本語の疑問文の過半数が対応するが、文化的な違いと類型的な違いから生まれる疑問文の形式の差と、やり取りの方法の差によって、疑問文の使用と疑問文の具体的な捕らえ方が違ってくる。この差は特に、質問ではない疑問文の場合に見られる。

従って、これからの研究の対象をもっと絞り、質問ではない疑問文に集中し、具体的な構造を比べたい。理想を言えば、こういった場面と目的であれば、日本語でこういった構造、英語であいった構造を使うという相関を明確にしたい。

一般化するために、適切なコーパスが大前提となる。従って、疑問文の形式判定基準がポイントになる。マーカーの相互排他性だけで対応できるのか、それとも場合によって終助詞だけでマーキングされた文でも疑問文として見なされるのかは、基本的な問題である。コーパスの例文の数と引用するテキストの種類を増やせば増やすほど、有効な結論を出せるのは間違いないので、今度のコーパスは文学的なテキストだけではなく、自然な言語に近い現代のテレビの連続番組の対話も使うことにする。コーパスの調査結果を解釈するには、Wierzbicka氏の理論だけにならず、日本の人類学などの研究も使っていく。

疑問文の形式と機能の研究を通して、言葉だけではなく文化についても色々知ることができる。それに、日本語を勉強する方にとどの場合どんな形式がどういう発話内力を表すのか説明できれば、より自然な日本語を、誤解なしで使えるようになるのではないだろうか。

文献：

1. Austin, J.C.: *How to do things with words*, ed. Urmson, marina Sbisá, Harvard Uni. Press, Cambridge, 1975.
2. Čermák, F.: *Jazyk a jazykověda*, Praha, Karolinum, 2001.
3. Delahunty, G. P., Garvey, J. J.: *Language, Grammar and Communication*, New York, McGraw-Hill, 1994.
4. Dušková, L. aj.: *Mluvnice současné angličtiny na pozadí češtiny*, Academia, 1994.
5. Dušková, L.: *An Attempt at a Classification of Irregular Sentences and Nonsentences in Studies in the English Language Part 2*, Prague, Karolinum, 1999, pp. 165 – 175.
6. Dušková, L.: *Negative Questions in English in Studies in the English Language Part 2*, Prague, Karolinum, 1999, pp. 131 – 143.
7. Dušková, L.: *Some Contrastive Notes on Interrogative Sentences in Czech and in English in Studies in the English Language Part 2*, Prague, Karolinum, 1999, pp. 120 – 129.
8. Grepl, M.: *O větách tázacích*, in *Naše řeč*, 48, pp. 276-291.
9. Heine, B.: *Cognitive Foundations of Grammar*, Oxford University Press, 1997.
10. Huddleston, R., Pullum, G. K.: *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge Uni. Press, 2002.
11. Kume, T., col.: *A Comparative Study of Communication Styles among Japanese, American and Chinese, Toward an Understanding of Interculture Friction*, coe-sun.kuis.ac.jp/public/paper/kuis/kume3.pdf
12. Langacker, R.W.: *Foundations of Cognitive Grammar - Theoretical Prerequisites*, Vol. I., Stanford, Stanford University Press, 1987.
13. Lee, D.: *Cognitive Linguistics – An Introduction*, Oxford, Oxford University Press, 2001.
14. Luftmanová, D.: Syntactic realization of the speech act of request from translation perspective , in *Acta Universitatis Carolinae-Philologica 2 Prague studies in English XXIII*, pp. 145-171, 2005.
15. Malá, M.: *Irregular Sentences in Colloquial English in Prague Studies in English XXII*, Pragur, Karolinum, 2000, pp. 79 – 90.
16. Nakada, S.: *Aspects of interrogative structure: A Case Study from English and Japanese*, Kaitakusha, 1980.
17. Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G.: *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, 1985.
18. Sadock, J.M., Zwicky, A.M.: *Speech act distinctions in syntax*, in *Language typology and syntactic description*, vol. I *Clause structure*, ed. Shopen T., Cambridge uni. press, London, 1985.
19. Searle, J.R.: A classification of illocutionary acts. in *Language in Society* 5, Cambridge Uni. Press, 1975.
20. Shibatani, M.: *The languages of Japan*, Cambridge Uni. Press, 1996.
21. Thomas, J.: *Complex Illocutionary Acts in Dynamics of Discourse*, London, Longman, 1989, pp.1-27.
22. Thomas, J.: *Meaning in Interaction: Introduction to Pragmatics*, Longman, 1995.
23. *Typological studies in languages 4 – Interrogativity*, Colloquium on the grammar, typology and pragmatics of questions in seven diverse languages, edited by William S. Chilstolm, John Benjamins Publishing Company, Philadelphia, 1984.
24. Vanderveken, D.: *Illocutionary Logic and Discourse Typology*, in *Revue internationale de philosophie*, volume 55, pp. 243-255, 2/2001.
25. Watanabe, M.: *O podstatě japonského jazyka*, Praha, Karolinum, 2000.
26. Wierzbicka, A.: *Cross-Cultural Pragmatics – The Semantics of Human Interaction*, mouton de gruyter, New York, 2003.
27. Wierzbicka, A.: *Understanding Cultures through Their Key*

- Words*, Oxford University Press, 1997.
28. 森山卓郎：表現を味わうための日本語文法、岩波文書、2002、～61.
29. 益岡隆志・田窪行則：格助詞、日本語文法セルフマスタースシリーズ3、くろしお出版、1997.
30. 鈴木重幸：日本語文法・形態論、むぎ書房刊、1982.
31. 飛田良文・佐藤武義：現代日本語講座、第5巻－文法、明治書院、2002.
32. 益岡隆志・田窪行則：基礎日本語文法－改訂版、くろしお出版、1997.

かなすぎ ペトラ／カレル大学 哲学部東アジア研究所 日本研究学科 博士課程1年